様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６５２００５

研究課題名（和文）メンタル・イメージが発話理解に果たす役割の研究：語用論の再構築に向けて

研究課題名（英文）The Roles of Mental Images in Utterance Understanding: Toward the Reconstruction of Pragmatics

研究代表者
松阪　陽一（Matsusaka, Youichi）

首都大学東京・人文科学研究科（研究院）・准教授

研究者番号：５０２４４３９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,500,000円、（間接経費）　750,000円

研究成果の概要（和文）：本研究を通して、心的内容が意味とどう関係するのかを解明するためには、聞き手が行う語用論的推論の研究から始めのではなく、むしろ話し手が自らがもつ心的表象をどのようにして言語化するのかのプロセスに着目する必要があるということが次第に明らかになった。これは、言葉の意味を、心的表象が言語化される際の規約に求める、新たな意味論の可能性を示唆する。こうした意味論の可能性については、Youichi Matsusaka, “Personal Pronuns”, Tokyo Forum For Analytic Philosophy(於東京大学文学部)、2013)においてその一端を発表した。

研究成果の概要（英文）：In this study, I found that in order to clarify the relation between meanings and mental contents one must start with the process in which a speaker verbalizes his or her mental representations, not with the process in which a hearer interprets an utterance. This opens up the possibility of a new semantic study, according to which the meanings of linguistics expressions should be taken as the convention according to which a speaker verbalizes his or her mental contents. I presented part of this result in (Youichi Matsusak, "Personal Pronouns", Tokyo Forum For Analytic Philosophy, 2013, at University of Tokyo).

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：西洋哲学　言語哲学　意味論　語用論　言語学　分析哲学

## １．研究開始当初の背景

近年、言語哲学上の諸問題がもつ語用論的推論との関係が注目されつつある。研究代表者もこれまで、指示の問題を語用論的な側面から考察してきたが（松阪陽一、「指示と意図」、『岩波講座哲学３』2009)、その過程で、現在提案されている語用論的枠組みは、必ずしも十分なものではないという認識をもつに至った。

意味の基礎を心像に求める見解は、哲学史上イギリス経験論までは支配的であったものの、フレーゲとウィトゲンシュタインの批判以来、現代の分析哲学ではほとんど顧みられることのない学説になっている。

おそらくこうした傾向と無関係ではないだろうが、現代の語用論研究では、話者や聞き手の合理的推論能力や認知的効率性に着目する研究が主であり、会話の参加者がもつ心的内容、特にそのイメージの内容に着目する研究はほぼ存在しなかった。

しかし、言葉の意味を主体の心理状態と深く関係するものとする見方はアリストテレス以来、むしろ哲学の歴史上支配的な見解であったと言えるし、現代の脳科学、認知科学の領域では、発話理解に知覚的イメージが深く関与することが明らかになりつつあった。心理言語学、神経言語学の成果は、発話の理解が知覚経験の呼び出しと密接に関連しており、発話を理解する際に、人間は「思考の言語」(Fodor)における抽象的な語のようなものを操作しているのではなく、具体化されたイメージを（多くの場合無意識的に）直接操作している可能性を強く示唆している。(Cf. Vigliocco, G. et. al, "Semantic Representation", in Oxford Handbook of Psycholinguistics, 2007)

こうした状況に鑑み、論理学の言語をモデルにした言語観をいったん置いて、主体の心的状態と言葉の意味との関係を新たに問い直す必要が生じているという認識のもとに、本研究はスタートした。

## ２．研究の目的

本研究の目的は、発話理解の基礎にメンタルイメージの構築を置くことにより、語用論をいまいちどその基礎から作り直す試みを始めることにある。特に、メンタルイメージが発話理解において果たす役割を明らかにし、その成果に基づいて新たな語用論的原理を提出することにあった。グライスの会話の格率に代表されるように、従来の語用論の原理の大部分は主に合理的な会話に対する要求という観点から提出されたものであった。これに対して、本研究は、発話理解にメンタルイメージが大きく関与していることから、聞き手が発話を理解する際の心的活動の性質から、語用論的効果を説明できるのではないかという着想に基づいている。

いわば、「会話がこうあるべきである」という視点ではなく、むしろ会話の参加者が「発話を現実にこのような処理をしている」ことを明らかにすることを通して、ある種の語用論的推論が説明できるという視点である。

## ３．研究の方法

研究の方法としては、主に次の三つを柱とした。

(1) フレーゲとウィトゲンシュタインによる心理主義批判を検討ことで、現代の言語哲学による諸成果と矛盾しない形での心理主義を模索する。

(2) 認知科学、心理言語学での最新の成果を調査することで、心的イメージがど

のような形で発話理解に関与しているのかを明らかにする。

(3)(1)と(2)の成果に基づいて、新たな語用論の原理を模索する。

４．研究成果

研究の初期段階において、グライスが「様態の格率」を用いることで説明した語用論的推論、” and” の時間順序に関する推論は、むしろ聞き手が行う心的処理の帰結として説明できるのではないかという着想が生まれた。心理学的な事実として、一般に、人間が所与の事柄に関して記憶している事実が多いほど、個々の事実の呼び出しには時間がかかる（ファン効果）。しかし他方、たとえ複数の事実であっても、それらが全体として、経験的に整合的な単一の「状況」を形成する場合には、個々の事実の呼び出しは容易になることが知られている（Singer, M., ″Inference Processing in Discourse Comprehension″, in Oxford Handbook of Psycholinguistics, 2007）。このことから、発話によって与えられた個々の情報が、イメージ可能な一連の「シーン」へと統合できる場合には、それらを切り離された別々の情報として処理するよりも、一つのシーンへと組織化して処理する方が、聞き手が発話を理解する際に有利に働くということが予測される。連言をわれわれが理解する際に時間順序を読み込むのが自然になるのも、まさにこうした（無意識の　）戦略の結果であるという可能性がある。

こうした成果は本研究を通していくつか得られだが、次第に明らかになったことは、心的内容が意味とどう関係するのかを明らかにするためには、聞き手が行う語用論的推論の研究から始めのではなく、むしろ話し手が自らがもつ心的表象をどのようにして言語化するのかのプロセスに着目する必要があるということである。これは、言葉の意味を、心的表象が言語化される際の規約に求める、新たな意味論の可能性を示唆する。こうした意味論の可能性については、Youichi Matsusaka, “Personal Pronuns”, Tokyo Forum For Analytic Philosophy(於東京大学文学部)、2013)においてその一端を発表した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0 件）

〔学会発表〕（計　2　件）

①松阪陽一、「直接話法の意味論と語用論 --- もうひとつの理論」日本科学哲学会第44回（2011年）大会

② Youichi Matsusaka, “Personal Pronouns”, Tokyo Forum For Analytic Philosophy(於東京大学文学部)、2013)

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
　なし

６．研究組織
(1) 研究代表者
　松阪　陽一　（　Matsusaka Youichi ）
　首都大学東京・人文科学研究科・准教授
　研究者番号：　50244398